
クッキー

美雁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クッキー

【Nコード】

N8361S

【作者名】

美雁

【あらすじ】

何の変哲もない雨の日　小さな出会いの話。

夏の盛りとは言え雨に当たれば寒い。まして北の地方だから尚更だ。濡れたワイシャツは肌にくっついて気持ち悪いし、髪だって同じだ。生まれつき噛み合わない歯がぶつかってかちかちと鳴る。ざわりと吹いた風に水滴が激しく顔を打って、その冷たさにぶるりと体が震えた。

今日は持ち物が多いからと折り畳み傘を置いてきたのは間違いだったか。心中で呟きながらべたりとへばりつく煩わしいスカートを片手で引っ張った。この近辺では可愛いと有名なブレザーだが、濡れ鼠になったこの状況ではそれ以前の問題だ。鬱陶しい、とワイシヤツを引っ掴んで、私はなお走っていた。

今日の降水確率は十%だったはずだ。降ったとしたってこんな土砂降りになるとなんて思いやしない。だから折り畳み傘を置いてきたのに、結局は御大層に大雨なんて降ってくれて、まあ。

“今日は気持ちの良い天気になるでしょう”

そう言ったお天気姉さんに心の中で毒づきながらひたすら走る。水たまりの水が跳ねるけれどももう既に体中びしょびしょだ。気にしないことにしよう。仕方ないから明日は制服をクリーニングに出してジャージで行くしかないだろう。

しかし傘を持っている人が意外と多くて走りづらい。皆さん意外と用心深いんですね、と厭味つたらしく毒づきながら、私は横の細道に逸れた。否、便宜上道とは言っているが正しく形容するとただの家の塀と塀の間だ。細いその隙間には何も物は置いていないから物置として使うにも手狭だし、両側の家の境界線みたいなものだろう。おそらく道として使っているのは私みたいな奇特な人間かこの周辺の家の人くらいだと思われる。家への帰り道としては回り道になるのだが、まともに走れない状況よりは幾分ましだ。

ばしゃばしゃと水の跳ねる音。大体なんだっていきなりこんな鬱陶しい雨が降るんだ。朝は見事に晴れていたし、雨の気配なんてしなかったのに。ぶつぶつと呟きながら濡れてへばりついた髪をかきあげる。切るのが面倒で伸ばし続けた髪だが、そろそろ潮時かもしれない。というか濡れて一番鬱陶しいのはこの長い髪だと今更ながらに気が付いた。今の状況で横の髪を前に持って来れば恐ろしい貞子さんができるかもしれない。

どうでも良いことを散々呟き続けて、私はやっと大きな道に出た。いつもの帰り道とは一本通りが違うけれど、こっちの方が人が少なくて良い。というか見た限りで人はいない。よし、と意気込んで全速力で走りだそうとして ふと足が止まる。無意識のうちに関目（かみ）に留まるものがあつた。首を傾げつつ雨の中私は辺りを見渡した。ぼたぼたと前髪から水滴が落ちるのが邪魔で横の髪と一緒に耳にかける。

この通りに人はいない。雨が降っているし当然といえば当然だろうか。それでも何か、と更に首を傾げると電信柱の陰に何かを見つけた。そこには雨に濡れてぼろぼろになった段ボールがあつた。それにはしいたけと書かれていて、中からは薄いピンク色の布地の何かが見えた。嫌な予感を感じながらも私は好奇心と妙な共感で段ボールを覗き込んだ。

“拾ってください 名前はクッキーです”

恐らくそう書かれていたであろう紙は雨に打たれたのか文字が滲んで読めなくなっていた。やっぱりか、と今更漫画でも見ないベタベタな文字をそつとなぞる。紙が崩れているのでなぞった文字もぼろぼろとはがれるように落ちていった。

中に入っている小さな肢体は雨に打たれ震えている。種は解らないが、恐らく雑種の犬だろう。小さな命だ。そつと私が触れても犬は動かなかつた。ただ、手から伝わる微かな鼓動が確かに命を感じさせた。

どうやら私も震えているようだった。体力には自信があるのだが

寒さには弱いようで震えた体を止める術を、私は知らなかった。

「君と、おんなじだね」

だからちよつとごめん、と小さく呟いてぎゅ、と抱き締めると彼（否、彼女かもしれない）の方がずっと冷たくて、死んでしまうんじゃないかと、私の目の前で息絶えてしまふんじゃないかと恐くなくなった。確かに脈打つその心臓にそつと安堵の溜め息を吐く。まだ、温かい。そつと触れ合ったところから私の体も少しづつ温かくなるような気がして小さく笑った。クッキーは動かないけれど少しだけ瞼を上げたようだった。

私、風邪でもひいてるのかな。普段ならどんなに可哀想に捨てられた犬だって気にも留めないのに。ああ、でももしかしたらいつもの私が変わったのかもしれない。だけど、どうだって良いか。濡れ鼠どうし、こつやつて温め合えるならこんな温かいこともない。

その後、どうやって家まで帰ったか全く覚えてないけれど走ってきた事は確からしい。泥の跳ねたハイソックスがそれを物語っている。クッキーに会って何か変わったかと聞かれたら答えは否だ。翌日からだつて至って普通に起きて、ご飯を食べて学校に行つて、帰つてきて、食べて、寝て。強いて言うなら、そう。家族が一人増えた事くらいだろうか。一人と呼べるかは微妙なところだけだ。

(後書き)

雨の日ってなんだか神秘的な気がしませんか？ 長く雨が降れば鬱陶しくもなるし、嫌な気がしますが、ざつと降ってからつと晴れれば虹が出ることもあります。それに窓に水滴が当たって歪む外の世界はいつもと違って見えます。一番身近な非日常が雨の日だと思います。

あとがきまでお読みくださり、ありがとうございます。誤字脱字等には十分注意していますが、何かおかしい点がございましたらお知らせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8361s/>

クッキー

2011年8月4日03時18分発行